光探訪

視覚研究グループ紹介

今回は，日本光学会の視覚研究グループを取り上げ，その活動，内情，将来などを何人かのメンバーの意見を参考に金子（ATR）がまとめてみました．

●視覚研究グループとは

前身である生理光学研究グループの時代を含めると，日本光学会（応用物理学会）の研究グループの中で，最も古いグループです．研究対象分野は，人間の視覚系の性質，機能およびその応用です．このグループは，主に研究者の間の情報交換，意見交換の場を提供するもので，互いの研究のレベルアップ，若手研究者の育成を目的に活動しています．会費は無料です．

●視覚研究グループの活動

視覚研究グループの活動は，現在のところ主に3つ．1つは，春と夏の応用物理学会講演会，Optics Japanの前後に研究討論会を催し，講演会の発表内容について掘り下げて議論します．2つめは，不定期に学術講演会を開くことです．海外の著名な研究者が日本に来たときなどによく開かれます．3つめは，海外の学会（ARVO：アメリカ眼光学会，AIC：国際色彩学会など）の講演内容を，出席した会員から電子メールで集め，ホームページ上で公開します．

●視覚研究グループの内情

表から見えるグループの活動は上に記しましたが，内情はいかがなものなのでしょうか．各活動について，会員の意見も交えて，もう少し詳しく述べてみたいと思います．

まず，研究講演会についてですが，これは半日または全日にわたって行われるもので，応物講演会では1件あたり15分程の発表が，30分から場合によっては1時間ほどの時間を費やされて討論されます．このため，若い研究者の多くは，「講演会の発表より緊張する」と言っています．しかし同時に，「批判，中傷（？）を含めて，自分の研究に対して，率直な意見を受けられる機会は得がたいので，非常に有意義だ」という声も多く聞かれます．

次に不定期の学術講演会についてですが，これは，場所，形態はその時々で異なり，企画者の裁量に任されています．例えば，98年12月に開かれたものは，場所は宇都宮大学，発表件数は3件とミニシンポジウムのような形態でしたが，97年12月に開かれたものは，千葉大でハーバード大学のCavanagh教授の講演会となっています．このように「おもしろいネタがあるときに自由に企画してオープンな会として開催できる」点が，この講演会のいいところでしょう．

最後に，海外の学会の講演内容紹介ですが，地理的，言語的な問題により，どうしても欧米の研究者に比べて情報収集が遅れるという日本人研究者の弱点を補う意図で始められました．しかし，「投稿数が多くなることが切に望まれる」という意見が聞かれます．これには，「学会参加人数が少ない」「郵送されるアブストラクト集から得られる以上の情報を付加できない」「内容紹介がWWWページに載るとなると間違いは恥ずかしいのでプレッシャーがかかる」等の理由が考えられます．

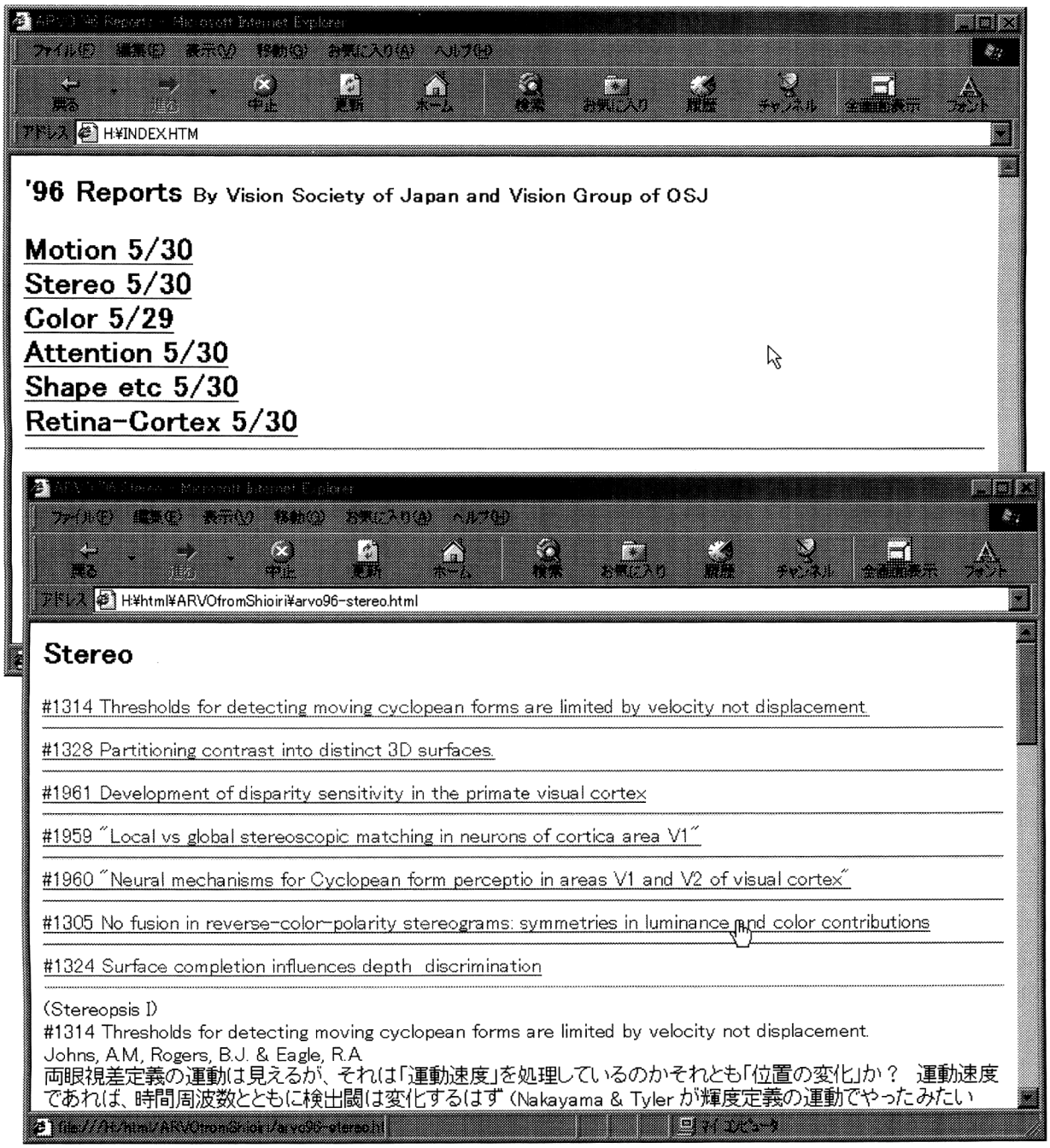
その他，視覚研究グループ全般に対する意見として，ポジティブなものとしては，「自由で損得勘定の必要がない」「会費がかからない」「じっくり討論をする機会が得られる」など，またネガティブなものとしては，「会への帰属意識がない」「光学会の研究グループとして活動を行うメリットがない」「人数が少なすぎる」などがありました．

●視覚研究グループの将来

視覚研究グループは，長年日本の視覚研究の充実に貢献してきました．その最も大きな成果は，視覚研究グループが母体となって「日本視覚学会」を設立したことだといえます．日本視覚学会は設立後順調に発展し，幅広いバックグラウンドをもつ関連分野の研究者の集まりとなっています．しかしそれと同時に，視覚研究の拡充という視覚研究グループのひとつの大きな目的は，達成されたと思われます．

それでは，これから視覚研究グループはどのようになっていくのでしょうか，また，どのようなグループを目指すべきなのでしょうか．

「日本視覚学会」という子どもを産み落とし，その子も順調に育っている今，視覚研究グループが行うべきことは，やはり，大きな学会ではやりにくい深い討論，議論を行い，研究の質を向上させることではないでしょうか．前身である生理光学研究グループのころからの会員によると，グループ設立当時は，それこそ膝を交えて深夜まで議論することもたびたびあり，研究会全体が大学のひとつの研究室のような雰囲気があったそうです．この原点にまた戻って，じっくりと静かに活動することが，視覚研究グループのこれからの姿なのではないでしょうか．



海外の学会（ARVO：アメリカ眼光学会）の講演内容を日本語で紹介する視覚研究グループの WWW ページ．

そして，視覚研究グループは日本光学会の中の研究グループであることをあらためて考えると，これからはその本来の立場をより明確に示し，光学の中での視覚研究の役割を果たすことも重要かと考えます．たとえば，光学技術も日進月歩で進んでいますが，その中には人間の視覚系の特性を有効に利用しようとする試みも最近は多くみられます．視覚研究グループはこのような技術開発のニーズをとらえて，視覚の基礎研究と応用技術開発の橋渡しを積極的にすることが，これからのひとつの目的ではないでしょうか．

視覚研究グループに関するご質問やご意見は，グループ世話人（塩入諭，千葉大学，shioiri@image.tp.chiba-u.ac.jp）にご連絡ください．また，光の広場のページに関するご意見は，itoh@bk.tsukuba.ac.jp，または，kikuta@measure.mecha.osakafu-u.ac.jp までお願いします．